

JAPAN URBAN DESIGN INSTITUTE

都市環境デザイン会議

東京都文京区本郷2-35-10
本郷瀬川ビル 〒113-0033
TELEPHONE 03-3812-6664
FACSIMILE 03-3812-6828

JUDI

074

20 SEPTEMBER
2003

特集 公募プロジェクト「長井フォーラム」の報告

発行者：都市環境デザイン会議 広報・出版委員会

●特集：公募プロジェクト「長井フォーラム」の報告	
1. 「長井フォーラム」の概要……………	1
2. 基調講演1 山形のローカルカラーを考える……………	7
3. 基調講演2 地域の色の活かし方……………	9
4. 事例1 江刺市の蔵を活かしたまちづくり……………	11
5. 事例2 港まち函館 色彩の変遷……………	12
6. 東北の田舎景観を求めて……………	13
7. 人首村……………	16
●連載コラム たどり着くためのデザイン……………	18
●選挙管理委員会……………	19
●事務局より……………	21
●編集後記……………	22

特集：公募プロジェクト「長井フォーラム」の報告

今号は第12期公募制プロジェクトで採択されたうちの1つ「地域のまちづくりを色彩から考える」～風土を基盤とする色彩作法づくりへの取り組み～の報告である。企画したのは東北ブロック及び北海道ブロックであり、具体的な活動を東北・北海道ブロックの共同事業として山形県長井市で展開した。東北地方には風土的特徴を持つ都市が数多く存在しているが、「地域のまちづくりを色彩から考える」というテーマの目的から考えれば、規模が大きく著名な都市よりも、むしろ地味ではあるが文化的底力を秘めた小さい「まち」が相応しいと考え、対象地を長井に選定した。

平成15年6月には「長井フォーラム」を開催し、色彩から地域のまちづくりの可能性を検証した。初日(6月21日)は、ステップ1「長井の色に染まる日」をテーマにやませ蔵を主会場に、講演やまち講座(住民による地域アピール)、まち歩き(長井の風土の検証・まちの色、ひとの色)、まちの色の整理をした。2日目(6月22日)はステップ2「長井のまちを染める日」をテーマに、やませ蔵と獅子宿を主会場に、講演、事例紹介(JUDIメンバーによる発表)、車座談義などを行った。以下にその取り組み内容を紹介する。

(編集担当ならびに協力：松村みち子 斉藤浩治)

特集 1

「長井フォーラム」の概要

斉藤 浩治
SAITOU KOUJI
JUDI東北ブロック幹事

1 テーマと主旨

テーマは「地域のまちづくりを色彩から考える」～風土を基盤とする色彩作法づくりへの取り組み～である。このテーマを設定した主旨は以下の通りである。

全国のいたるところで、地域の風土が持つ独自の色彩環境が失われつつある。長い時間が作り上げた風土の色を無視するように「迷走する騒色景観」がはびこっており、これを修復するための「色彩作法」が求められている。

そのまちの作法は長い時間の蓄積の中から生まれ、そのまちごとに異なるものである。それ故に、一般論を超えた解決策を模索するためには、その都市の生い立ちを知り、そこに生まれた文化を理解し、きめ細やかな眼差しを持ってその風土を見つめ、

これからのまちの生き方を考える必要がある。

また、自然光は地域ごとに異なる経緯遷移を起こすために、地域ごとに異なる「色彩方言」を形成していると考えられる。従って、色についての「標準語」が存在しないと仮説に立てば、そのまちの環境色彩はその地域の「色彩方言」が理解できる人が取り組まなければならない。

いま東北の中から、地域の歴史の中で形成された風土色に着目し、その地域の色彩環境を表現する「基本言語」として捉え直し、再構築することから始めたい。

…その主役はそこに住む住民である。

なお、本フォーラムは東北ブロック幹事の斉藤浩治と北海道ブロックの柳田良造が担当した。

2 長井というまちの資源

■風土的資源

長井市は、山形県南部の置賜郡に位置する人口約3万人の小都市である。地勢的には東に蔵王連峰、西に朝日連峰、南に飯豊連峰を擁する盆地状地形の中にあり、山々から流れ出る豊かな水は、最上川、白川、野川の三川となつてとなつてこのまちを潤している。

豊かな自然環境に恵まれた風土を活かし、農業を基幹産業とする田園都市として、「水と緑と花のまち」をキャッチフレーズとしてまちづくりを行っている。近年は、地域の台所と農業を結ぶ有機物の循環システム「レインボープラン」を実践していることで、全国的に知られている。

■歴史的資源

長井のまちは、上杉藩政時代の1690年代頃につくられ、米沢城下の物流拠点として、最上川舟運とともに発達してきた。京都や大阪との商業活動を中心として、長井袖や米などを出荷する商取引のまちとして、上方文化を受け入れる米沢の玄関口として、独自の文化を形成してきた。

その当時の面影を残す施設として、北の丸大扇屋(現在は文教の杜)、南の山清商店(現在のやませ蔵)が代表的な遺産である。

■文化的資源

最上川舟運時代から約200年間にわたって量産された「長井袖」は、高度な技と独自の色彩がつくりあげた長井を代表する文化である。現在は少量生産となっているが、その色や柄は現代にも通用する優れたデザインである。

また、全国的にも珍しい「むかで獅子」の形式を持つ「黒獅子」が継承されており、現在でも40を超える団体が季節ごとの祭事などの折に、神社などで舞いを奉納している。



3 フィールドワークの実行

初めて長井のまちを訪れた人たち(J U D Iメンバー)が、長井のまちについてその生い立ちを学び、長井のまち中を歩いて長井のまち色に染まりながら、まちの資源を発掘する事を試みた。

テーマ: まちなかにある素材と色の分布を把握する。

(1) フィールドワークの目的

- ・まちなかの資源の再認識
- ・住民が気付いていない資源を発見する
- ・場と物の相対関係を見る(市街地の特性を踏まえた存在の発見)



写真2 まちなかの資源の再認識



写真3 造り味噌屋



写真4 フィールドワーク結果の整理

写真1 フィールドワーク
まちなかのいい色探し

(2) フィールドワークの視点

- ・まちなかのいい色を探す(長井に合う色、長井らしい色)
- ・今の時代に生きるものを見つける(歴史のあるものでも新しい時代を呼吸しているかどうか?)
- ・素材を含めて色を見る(瓦の色・壁の色、木の色・花の色、看板の色)・・・新旧問わず

(3) フィールドワークの場の設定

- ・まちの中心部とまちの縁(ふち)・・・北のまちと南のまち
- ・表通りと裏通り
- ・古い町並みと新しい町並み(時代による中心性の変化) など

(4) フィールドワークの方法

- ・対象空間と素材の設定を行う。
- ・各自の希望でグループを分ける。
- ・まち中の素材の色をカメラでスケッチする。カラーシートを使って壁や屋根の色を収集する。
- ・短時間でプリントして、グループごとに写真上台紙に張り込み傾向を分析する。
- ・特徴的な素材と色を大きな用紙に貼り込んで曼荼羅図を作成する。

4 長井のまち色分析

まち歩きで撮った写真をグループテーマごとに模造紙に貼り込み、それを見ながらみんなで長井のまち色の特徴の分析を行った。

(1) フィールドワーク結果の整理

まち歩きの実感としては、表通りの景観よりは裏通りの景観にいい要素が多く見つけられた。

まち中に生垣などの緑が多く、それが色彩のアクセントになっている。だから人工的な緑の色がこのまちの景観にそぐわない。

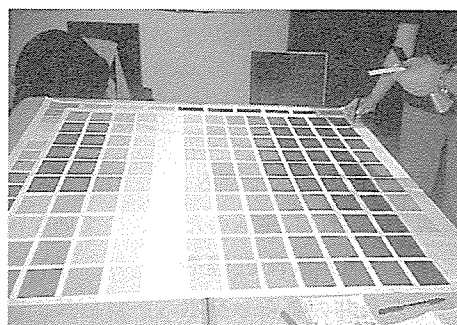


写真5 カラースケールによる色の分析

水路のある景観がひとつの特徴である。水路の存在をもっと活用できないか。

建物は木造で黒っぽい壁の色が多い。素材の持つ自然な色が多い。対比的に白い壁も目立つ。

素材の持つ色の良さや深みが感じられる。人工的な塗装の色は平面的で良く見えない。

土地の人の感覚も昔よりは風土に合う自然な色調を選ぶようになってきた。

舗装材の色にまちの基本色が使えればいいと思う。(アスファルト一色でなく…)

市街地の東側に見える山並みが京都のそれに似てとても綺麗だ。山並みの景観(遠景)が見えるような街づくり、道づくりが必要だ。

(2) まちの色調の分析(佐藤邦夫先生)

カラースケールによって、まち中に点在する素材の色を分析した。

基調色としては、ライトグレートーンやダークグレートーンが多く、アクセントカラーとしては、花などの赤紫系と看板に赤系が多い。全体的には中間色で穏やかで平和的な潤いと安らぎのある色調で構成されている。

中でも茶系統の色がひとつの特徴である。屋根の色にグリーン系が散見されるので、茶とグリーンの組み合わせがひとつの方向性となる。また、黒と白の蔵のイメージも強い。

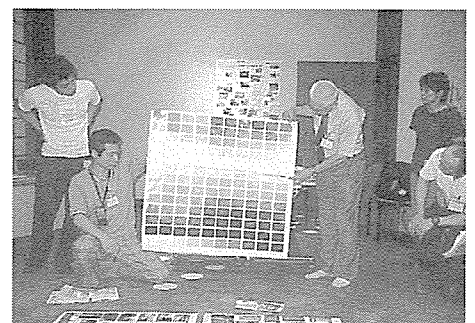


写真6 長井のまちの色調の分析

長井のまちは、三方を山に囲まれて南に開けた地形のため、東北地方には珍しくライトグレイッシュな色が美しい所である。

5 長井紬についての特別講演

まち歩きの写真ができるまでの空き時間を利用して、やませ蔵副館長の竹田靖子さんが秘蔵の長井紬の見本帳を出して説明をして下さった。

講演の概要

- 明治初期、新潟の小千谷から腕のいい職人を招き、独自の技を高度に進化させたことで、全国的に普及が広まった。
- 明治19年から昭和の初期までの多量の見本帳が保管されているが、反物はひとつも残っていない。
- 明治以降、最新の柄を百貨店が集約した時代には、三越のデザイナーが起こした図案を元に織った柄物も多い。

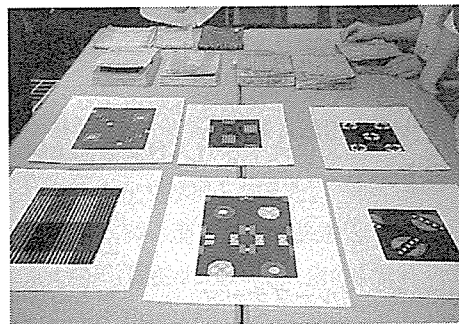


写真7 長井紬の図案の原画
今でも通用しそうなモダンな柄が多い

6 フィールドワークの成果

(1)まち並みをつくる色

長井のまちは、歴史的な建築物が多い。その多くは木造に漆喰の白い壁という日本古来の手法であり、瓦屋根や板壁、縦格子戸に障子といった自然素材の穏やかな色を今でも残している。その中に混じって点在する蔵も、多くは黒い板張りに白い漆喰の壁であり、飾り気はないが端正な美しさを見せている。

(2)水辺の色

長井のまちは「水のまち」である。周囲の山々から流れ出る豊かな水は、幾筋もの川となって長井のまちを潤している。表通りから一歩裏通りに入れば、生活のための小路の横には常に小川が流れて、軽やかな水音を立てながら長井の暮らしを水面に映し出している。

(3)アクセントカラー

長井のまちは、自然素材の穏やかな色が多い。でも、注意深くまちなかを観察すると、その中に点在する鮮やかな「アクセントカラー」が見えてくる。それは、伝統的な味噌屋の看板の文字であったり、朱色に塗られた倉庫の扉の色だったり、玄関に飾られた一輪の花の色だったりする。しかし、最も鮮やかな色は、水辺や庭先に植えられた植物の緑かもしれない。

(4)長井のまち、今の風景

長井のまちは、風土的資源や歴史的資源に恵まれた魅力的なまちである。まちの中の道は今でも藩政時代の面影を残した小路が多く、その横にはかつて生活用水であった水路がいたるところに流れている。まちの中心部を歩いても、ほとんどの建物は2階建ての低層家屋であり、まちのスケールに似合った空間を形成している。舟運時代をしのばせるように、まちのいたる所に蔵づくりの建物が点在していることも、大事な資源である。また、明治～大正期に建てられたモダンな洋風建築が、今でもまちの景観に彩りを添えている。

このように、風土的資源に恵まれたまちではあるが、まちの中心部の目抜き通りを歩いてみると、その資源がまちづくりに活かされていないという思いが湧いてくる。そこにあるのは、全国津々浦々を席捲した「どこにでもある商店街」の景観をつくろうとした形跡であり、長井らしさを感じる景観とはほど遠いことに思えるためである。

(5)中心部の商店建築に見る問題点

○迷走する景観(個の主張の集合体)

長井のまちなかには、明治・大正期に建てられたモダンな洋風建築が今でも点在しており、これがまちのアクセントとなっている。医院の建物もそのひとつであるが、その存在感を損うようなデザインの建物がその前後に建ちならび、統一感のない景観を生み出している。このように、新しくつくられる建物の自己主張が強すぎることで、周囲に存在する建物との調和が考慮されていないこと、が問題である。

○風土になじまない建築

現代的な明るいイメージの「商店街」を

目指したのであろうか、このような地域を感じさせないデザインの建築が点在している。しかしこのような建築が出現する背景には、個人(店主)だけの問題ではなく、住民の中にもそのようなものを求める意識があると思われる。

このまちに必要なことは、「どこにでもある商店街」を追い求めるのではなく、長井にふさわしい商店街をつくらうという合意形成ではないかと思われる。

○地域の資源が埋没

長井のまちの個性ともいうべき蔵づくり建築がまちの景観に活かされていない。右の写真はその典型である。通りに面した蔵を商店として活かしているが、そのファサードはいわゆる「看板建築」であり、蔵の存在を隠すものである。その前に立っている街灯のデザインと合わせて、地域の資源や個性とは掛け離れた価値観で景観がつけられている。

7 地域づくりへのキーワード

長井のまちは、風土的、文化的、歴史的資源に恵まれた豊かなまちである。この基本的なことが今回の活動を通して、まちの人

たちと一緒に再認識できたと言える。この資源がこれからのまちづくりを考える原点であるべきだ、と言うのが参加者の共通意見である。

他所のまちを真似るのではなく、いにしえからの長い時間が育んだこの土地の宝を守り、新しい時代の価値を添えて次の時代へ伝えること、が大事なことである。今回のフォーラムでは、まち並みを観察する要素として「色彩」を取り上げたが、それが長井の魅力を映し出す鏡となって様々なことを我々に示唆してくれた。長井には風土に育まれた多様な色彩があること、その多くが自然素材の持つ色であること、それを上手に使うことで生まれる調和こそが長井のまちの個性であること、などである。またそれらの色彩は、本来、永遠不滅ではなく時間とともに色あせるもの、周りの自然とともに移ろいゆくもの、それが美しさを醸し出すものである、ことに改めて気付かされた。

以上のことをこれからの長井のまちを造る「しきたり」として捉え、新しい時代の価値を添えながら住民みんなの手で、「まちづくり作法」に到達することに期待したい。

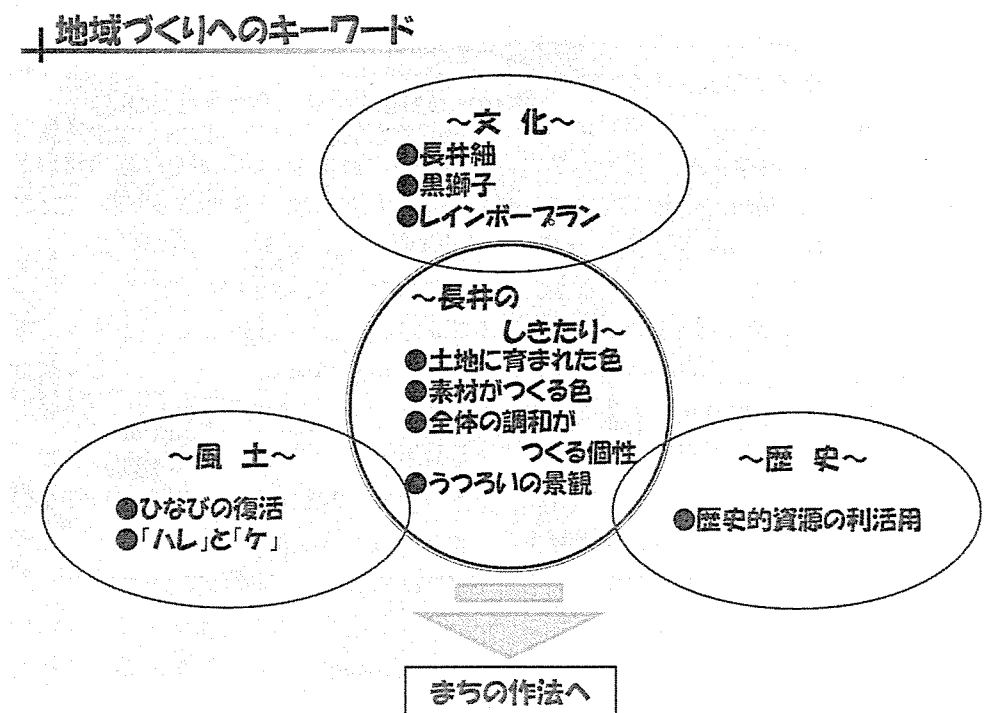


図1 地域づくりへのキーワード

8 まちづくりへの提案1

その土地の「まちづくり作法」はそこに
住む住民が自ら考え、自らの手でつくり上
げるものである。そのことを前提としながら、
敢えてJUDIとしての提言を試みるならば、
下記のようなことを提案したい。

長井のまちづくり作法(提案1)

「質感文化への回帰:風土が生み出した素
材の豊かさや色の多様さをまちづくりに
活用する。」(図1)

まちをつくる多様な要素(建物、生垣、舗
装材、…衣服…食料)の中に、風土が生み出
した自然の素材を活用する。人工的で刺激
的な材料や色の使い方を見なおし、素材の
持つ木目細かさ、風合い、手触り、と言った
素材の「質感」にこだわって、まちづくりを
考える。

また、その素材はできるだけ地域内で生
産し、地域内で消費し、地域内での小さな
循環を実現することが、地域の新しい活性
化を生むきっかけとなる。

そのことを可能にするだけの資源を長
井のまちを持っている。

9 まちづくりへの提案2

長井のまちづくり作法(提案2)

「旬が輝くまち並み:ハレの日の色(まつり
の獅子舞や季節の花の色)が輝くまち並み
をつくる。」(図2)

多くの都市において、まちの中心的な繁
華街は華美で刺激的な騒色であふれている。
まるで毎日がお祭りであるかのような喧
騒に包まれて、人々は消費するためにそこ
に集まる。一度、刺激的な環境に染まれば、
さらに強い刺激を求めてさまよい留まる
ことを忘れてしまう。

長井の日常的な暮らしの空間は、決して
華美である必要はなく、むしろ繊細で落着
きがあり、質感豊かなしっとりとした雰囲気
であるべきではないだろうか。暮らしの
華となる「賑やかさ」は、それが相応しい季
節ごとにまちに「彩り」を創り出してくれ
ばいい。祭りの日には獅子舞や囃子の音色
がまちの景観をつくり、花の季節には「あ
やめ」や「つつじ」がまちを彩る主役となる。
桜や雪景色のように、季節の彩りは旬の輝
きが似合うものであり、移ろうものの美し
さがそこには感じられる。長井のまちは「旬
が輝くまち並み」が相応しい。

新しい作法

旬が輝くまち並み(ハレを生かす色づかい)

- ・ 日常的な暮らしの空間は繊細な自然素材でしっとりと形成
- ・ まつりの獅子舞や季節の花が旬の輝きを見せる
- ・ 移ろうものの美しさ(緑の輝き、花の彩り、水面のきらめき)

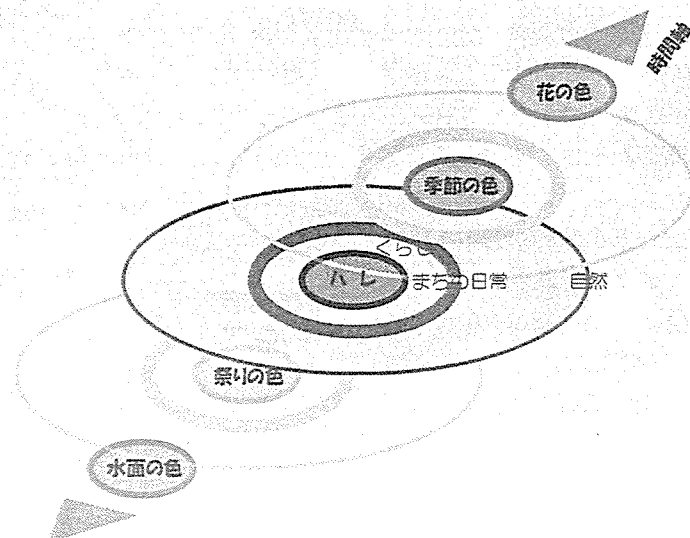


図2 新しい作法

基調講演 1 山形のローカルカ ラーを考える

日原 もとこ
HIHARA MOTOKO
東北芸術工科大学

■規範のない時代

今の若者たちは膨大な情報量を抱えながら、それをどう処理するのがわからない。マニュアルを知ると誰よりも早くできるが、それが正しいかどうかかわからない。何を「よすが」に生きるのか、自分の影を探して彷徨っている。今、癒しブームだが、彼らは何によって癒されるのか？

昭和30年代までは、日本人にはアイデンティティがあった。日本固有の文化や規範が生きていたが、戦後、小中学校の教育方針がアメリカを追従するようになった。戦前の規範としては、質素倹約、礼節…勤勉、忍耐…公德心、信仰心といったものを大事にしていたが、戦後、そういうものは一切構わない風潮となった。今の親もその規範を知らないから、子供にも教えられない。むしろそのような規範を壊そうとした時代であり、それが高度成長の推進力にはなったが、人間性についてはいつてなかった。21世紀のいまでもその副作用が残っている。

■高度成長がもたらしたもの

いまでも西高東低の社会構造であり、地方分権といいながら中央集権である。若者はまだまだ欧米指向である。しかし、これからの世の中の流れは、これまでとは逆行する方向の思想となる。そのキーワードは、万物共生、循環、バランス、スローライフ、ローカル化などである。

20世紀に足りなかったことは、「美意識」である。今までずっとグローバル化が進んできたが、これからはローカル化が大事である。小さな地域を少しでも美しくしていこう、という思想が芽生えている。高度成長がもたらしたものは、日本の景観の無国籍化である。アレックス・カー氏は「日本人は美に対しては敏感であるが、醜さに対しては鈍感である」と警告した。

騒色公害が醜さの原点である。騒色はしだいに過剰になるので、やがて建物全体が看板化するような状況になる。子供たちは生まれた時からその景色がインプットされ、高いレベルでチューニングされることによって、騒色に対して無感覚に成長している。

■日本の景観が壊れる理由

世界的に都市居住人口の増加が予測されている。しかしその反面、都市に住む人

は自然豊かで伝統的な風景を好み、農村に住む人は人工的で近代的な風景を好むという調査結果がある。西日本は渡来文化(弥生文化)で華麗に人工美を良しとする「雅(みやび)」の文化、東日本は蝦夷文化(縄文文化)で素朴で自然美を良しとする「鄙(ひなび)」の文化である。

元来、東日本には「雅(みやび)」の文化はなかった。遺伝子がそのように整えられていたが、今は東北人も自然景観に対する感性を失っている。

■精神世界への回帰

景観の問題について別な次元の行動をしなければと思い、山形の作谷沢という中山間地域を対象として研究を進めている。その土地に入り込んで、その土地の「宝」を歴史の中から拾ってくる。この地区は、中世の頃から庶民信仰、修験道のメッカであり、おびたしい数の祠や野仏や小さな神社などの祈りの跡がある。

また、数多くの民話がある。冬の間の一番の楽しみは、囲炉裏ばたでおばあちゃんが語る民話であった。雪に閉ざされて真白い世界を毎日見ていると、いろんなイメージが湧いてくる。ちょっとした物音にも「もののけ」を感じる。民話は心の世界に生じたものであるが、もしかしたら虚の世界ではなく、実の世界ではないか。このことから騒色の問題も物質の世界ではなく、精神世界が大事であることに気がついた。地元の研究者によれば、この土地は万物共生の土地であり、人も動物も神も仏も仲良く交わる天国のような場所であった。村の周囲の三つの山を結んで「領界まんだら」と呼んだ。

今は過疎の村であるが、何とか知恵を集めてもう一度活性化しようと、「まんだら塾」を立ち上げて村民と一緒に活動が続けている。

■繁栄がもたらしたもの

今や地方は完全に消費社会になった。物価の安い地方では必死に働かなくとも生きて行ける。地方が享乐的で都市住民が汗水流して働いている。(地方で多発する犯罪の原因は)急激な消費社会と伝統的な農村社会的価値観の相克による社会変動が犯罪に結びついたのではないかな。また、多く

の団地で作られる建物の外観は、無国籍でファッションショーの状況である。このような現象は、日本人がきちんとした哲学、理念を持っていないためである。山形から日本全体を改革しなければならない。

■日本古来の色彩観

日本人の色彩感覚は明暗顕漠であり、色彩を意識しなかった。高温多湿の国であり、自然の色の移り変わりが美しかった。人間が手の施しようがないものであり、それを受け入れてきた。これに対して西洋文化は人間が造り出したものであり、付け加えるものであった。

日本人の生活は「ハレ」と「ケ」のライフスタイルで営まれていた。「ハレ」の日はごく一部でほとんどは「ケ」の日であった。「ハレ」の色は赤、「ケ」の色はもともとは白だったが西洋文化が来てから黒になった。白は潔白、清純無垢の色。「ケ」の場合でも人は輪廻転生で再生するという意味もあった。死は悲しみではなくあの世への再生であり、祝うものであった。

■環境色彩(スライドによる紹介)

[東京の下町]人工物(工業製品)は物質の死んだ色。下町の風景はグレイ一色。屋根の色は赤か青が多い。その中でも青が優勢なのは江戸時代の遺伝子によるもの。

[山形の風景]新しい建物の色が白すぎてしっくりこない。周りが自然豊かなため、白い色が主張しすぎる。また、ペンキを塗り替えると色が濃くなる。

[橋梁の色]大きな構造物の色が景観に配

慮されていない。

[アジアの辺境に見る色]

・テントの色が真っ赤。生活用品も原色だらけで「ハレ」も「ケ」もごっちゃになっている。

・その中に日本ではあまり使わないグリーンがある。山形ではラ・フランスの色として使われている。東北にはかつてペルシャ人が多かった歴史があり、その関連性を感じる。

・赤はどんな所でも惹かれる色である。赤に対する日本人独特の精神性がある。

[西馬音内の盆踊り衣装]

・祭りの日に着る「継ぎはぎ」の衣装にも赤を好んで選ぶ。踊る様には実に妖艶な魅力がある。

[作谷沢の風景]

・砂漠の色は有機物の死んだ色。その色に囲まれて住む人は、バランスを取ろうとするために原色を求めざるを得ないことが分かった。鄙びの世界(自然豊かな環境)に生活する人は、その中にいかに埋没するかということを考えないと、想像力もイマジネーションも働かない。

■結 論

日本には「雅(みやび)」の世界と「鄙(ひなび)」の世界がある。多くの文化が「鄙(ひなび)」の世界で育ってきた。その景観がどんどん壊れて人工都市化している。僅かに残る自然環境はもっと大切にされるべきである。そこに色を与えるのではなく、いかに人工的な色を剥ぎ取るか、今はその方向で考えている。

講師紹介

東北芸術工科大学 デザイン工学部 生産デザイン学科教授
専門分野:環境色彩学、応用人間工学、基礎造形理論
主な社会活動:山形の景観を考える会 世話人会事務局長
作谷沢地区まんだら塾塾長
公共の色彩を考える会常任理事ほか多数歴任

基調講演 2 地域の色の活かし方

佐藤 邦夫
SATO KUNIO
感性マーケティング研究所

■地域による自然光の変化

国内、国外を旅行する機会が多いが、北の国と南の国では海や空の色が違って見える。若い頃に北海道の摩周湖のほとりでタバコに火を付けようとした時、ライターの炎の色が妖しい色に見えた。また、九州の南端ではライターの炎の色が見えなかった。そのことで緯度の違いによる光線の色の変化に気がついた。

以前、関西系のジャスコが東北向けに暖色系の服を作ったが、全然売れなかった。その理由は、東北の人は青味を帯びた自然光の中で暮しているので、クールな色に慣れ親しんでいることによる。また、関東と関西でも色や柄の好みが全く異なる。地域によって売れる色と売れない色がある。その後は、出張するたびに色温度計と照度計を持ち歩いて観察するようになった。

■色温度と色の見え方

色温度と色の変化が対応している。光の色相のようなもので、k(ケルビン)°Cで表わす。照度はlx(ルクス)で表わし、白熱灯が3000k°C程度でやや赤みを帯びた色になる。また照度は、灼熱の砂漠が10万ルクス、白夜の北極で10ルクス程度になる。日本列島はちょうどその中間に位置するので、沖縄から北海道までは2万5千ルクス違う。明るさが違うと、明るく派手な色はルクスが高いところできれいに見えるし、ルクスが下がると暗い色が細かく見分けられるようになり、明るい色が翳りを帯びるようになる。また、緯度によって照度と色温度の組み合わせが異なるので、色を選ぶ時には緯度が何度の場所であるか、がポイントになる。

■色がきれいに見える要素

1番目は緯度であり、その地域の緯度によって照度と色温度が違ってくる。2番目は湿度で、曇った日と晴れた日では見え方が違う。3番目は標高で、海拔1000m近くになると紫外線が強くなり、高山植物の花の色も紫色が多い。標高が低いと赤外線が強くなり、原色の水着がきれいに見える。

4番目はその土地の方位(どちら向きに開けているか)である。関西は西向きに開けた土地が多く、午後のアフタヌーンライトを受けるので、あずき色などが良く見える。

(近鉄や阪急の電車の色)

関東や仙台は東向きに開けた地域である。青島という地名は、昇る朝日の光を受けて逆光で見ると青く見える場所である。朝8時前後の時間帯でみると新緑の色が美しく見える。

■地域ごとの色の見え方(スライドによる説明)

[銚子と鳥取] 同じ時期でも太平洋側では純色に白を混ぜたような色(清色系)、日本海側の鳥取では湿度の関係で霧が発生しやすいため、グレー系の色で細かいニュアンスを持った色(濁色系)がきれいに見える。

[視覚器官へ与える影響] 人間の成長過程で視覚器官が出来上がるのに、16年から17年かかるといわれている。その時までにはどの土地にいたかによって、色の嗜好が決定される。その土地できれいに見える色を好きになり、汚く見える色は嫌いになる。
[日本の東と西] 日本アルプスを境界線にして、長野から東はモーニングライトできれに見える。西側はイブニングライトで午後の景色がきれに見える。

[富士山] 東側から見た富士山は、(湿度の関係で)冬にならないと良く見えないが、東京からは青く見える。西側から見た富士山は夕日を受けて赤く見える。北斎の「赤富士」は西側から見たもの。静岡から以西の人にはお馴染みの風景である。

[東京のイメージ色] 山手線の車体を黄色に塗ったら評判が悪く、グリーン(若草色)に変えた。アメリカの色彩学者ビル・マイヤー氏に東京で印象深い色を聞いたところグリーンと答えた。飛行機から見る房総半島はビロードの絨毯のように緑がきれに見える。

[セーヌ川の河畔] パリのセーヌ川のミラボー橋はオリーブ系の中間色にして、ベージュ系の多い建物とうまく調和している。また、モダンな建物でも周囲の色と矛盾しないように配慮している。

[日本列島の緯度遷移] 日本列島は南北にレインボーのように色が変わる。北へ行くと色温度が上昇していくので、北海道のラベンダーや摩周湖がきれに見えるのは大気の色が染まっているため、沖縄の琉球瓦も赤のスペクトルが強い光線の下で美しく見える。

[東北地方の工芸品] 大堀相馬焼きは青磁色が地肌になっており、関西には見られない色相である。津軽塗りには緑うるしというのがある。伝統工芸品にはその土地の自然光で美しく見えるその土地の素材の色が使われるので、その土地の風土色を探す時の手掛かりになる。

[川連漆器と会津塗] 朱の色が西の物とは異なるが、赤は光線が青っぽくなくても訴求力がかなり強いので、アクセントカラーとして、日本だけでなくどの国でも使われる。

[置賜紬(おきたまつむぎ)] 暖色系をハーフトーンに薄めると青い光線でもきれいに見える。長井紬も地色のダーク調以外の色はきれいな色である。

[塩沢紬] 新潟地方はグレイッシュなトーンが使われる。

[秋田の樺細工]このような素材感(テクスチャー)に敏感なのは、照度が低くグレイッシュな光線となる地方の人である。木目細かいところが良く見える。大館の曲げわっぱ、岩谷堂箆笥、天童

の将棋の駒など、凝った木工の細工師がいるのは、優れた素材感覚を持っているからである。

[南部鉄器]これも関西の鉄製品に比べると、かなり青味を感じる。囲炉裏やろうそくの火の光で見ると、非常に重厚で美しいものである。

■基調色と強調色

都市景観の色を決める時には、基調色と強調色の両方を取り入れるように提案している。色相は違っていても明度、彩度に整合性があると町全体はきれいに見える。それで標識類などにアクセントカラーを使うとサインが引き立つようになる。

日本人は古くから贅を尽くすような風潮があったのだから、企業の都合で画一的な量産品ばかり作っているから不況から脱出できない。カラーも町や個人の個性イメージアップに役立つようなことができないといけない。

■まちづくりへの提言

これからの地方自治体は、市民の力を借りながら株式会社のように独立しなければならない。成功している例としては、つくば(学園都市)、角館、熊谷、小布施(伝統景観)など。個性づくりの手法としては温泉、音楽、バイオテクノロジー、味覚の集積なども有効である。これからはエンタープライズの企業誘致を含めてアーバンデザインを考えることも必要でないか。

全国的に花屋が大繁盛しているので、フラワー長井という名前を活かすと良いのでは。町中に花屋を点在して、和花、洋花の両方で12ヶ月花を売る。また、これから病気の老人が増えるので、漢方の薬草やハーブなども栽培する。レインボープロジェクトの熱を利用した温室もできるので、12ヶ月花を育てて、全色相の花をつくる。日本人の審美眼に合うため、ますます花市場は拡大する。水の便が良いので、サントリーや麒麟など花ビジネスを展開している会社が来るかもしれない。

この地には、ハンドクラフトの才能を持った小中学生がいると確信している。また、全国的におちこぼれや登校拒否の子供がたくさんいるが、その子が大工さんになりたいと思って学校がない。純粋芸術から左官屋さん、表具屋さんを小さい頃から養成する機関があれば全国から人が集まる。

獅子頭や剣玉づくりをリタイヤした名人から基礎として教えてもらう。プラスチックのような汚染物質を含まない木工品の玩具などは環境の面でも有望だし、動物模様のジグソーパズルなどは大人にも受ける。中学から高校くらいになったら外国から講師を招聘して、スウェーデンなどの高度な木工技術を学べるようにする。木造住宅や家具などの技術は外国製に学ぶべきものが多い。このような市場は今後大きな需要が見込めるし、長井のまちにはうってつけではないか。まちをきれいにすることは子供の頃からファッショセンスが養われて、いい人材が育つ下地になる。

感性マーケティング研究所 所長

専門分野:感性マーケティング技法に基づくカラー開発

主な社会活動:テイストスケール法の開発(日米の特許取得)、公共色彩に関するアドバイザー多数、大手企業の色彩設計やカラー開発を多く手掛ける

講師紹介

事例紹介 1 江刺市の蔵を活かしたまちづくり

及川 純一

OIKAWA JUINICHI
JUDI東北ブロック

江刺市は、昭和32年に1町5村が合併してできた町であり、当時は5万人規模のまちとしてスタートしたが、現在は3万5千人を下回っており、県下13市の中で唯一過疎指定を受けている。

平成5年には、NHK大河ドラマ「炎たつ」のメインロケ地となった歴史公園「江刺藤原の郷」がオープンし、年間30万人の観光客を集めている。しかし、その来訪者が商店街に足を運ぶことはなかった。

一方、商店街の道路拡幅事業に伴い貴重な「土蔵」が次々と取り壊されていく。この現状を打開し、将来に希望をもち、次世代へ価値ある建物を残したいと考え、「蔵」を活かした商業振興を目指して若手経営者11人が発起人となり「黒船」の街づくりが平成9年にスタートした。

江刺に蔵が多いのは、かつて明治37年から3年連続して大火に見舞われ、述べ1千棟以上を焼失した事の反省から火に強い蔵を採用した事にある。そのため、明治40年前後に作られたものが多い。また、江刺の蔵は文庫蔵が多いために裏路地に集約されており、それがひとつの良い景観を創り出している。

まちづくりを運営する組織「黒船」は、完全民間の株式会社であり、資本金は約1億円である。主な事業としては、ガラス館とオルゴール館の直営である。ガラス館の建設に当たっては、滋賀県長浜市の「黒壁」のノウハウと資本が導入された。建物は古い蔵を改築しているが、民間活力の向上につながるとして蔵の曳きや改修費用として県、市より1千万円の補助金が交付された。

ガラス館は、新築のショップと蔵を移築改修した工房の二棟で構成されている。ショップは木造漆喰壁、瓦葺の二階建て、土蔵風の洋館。1階は隣接する工房で制作された製品と国内で作られたガラス製品を販売している。2階ではサンドブラスト、ステンドグラス教室を併設している。工房では、制作課程を見学できるほか吹きガラスの教室を行なっている。

また、景観としての蔵とともに、「音」をまちづくりのテーマとしている。音を景観のひとつとして捉えて、暮らしの中にある何気ない音を大事にしていきたい。箆笥屋のかんなの音、井戸端会議の方言、小鳥の鳴き声…。これをマップにして街歩きに活用している。

オルゴール館(キンコン館)は音のテーマ館であり、展示するものは各戸の蔵の中に眠っている「かつて音がしたもの」を集めた。脚の折れたピアノ、大正琴など。全ての物が自由に触って良いとしている。すると見学者の人が琴を調律してくれるなど、意図せずして住民参加型の博物館とすることができた。お金を掛けずに成功した例と言える。

今後は、コミュニティビジネスの確立を目標としている。地域の文化と資源を大切にしたい身の丈に合ったまちづくりを続ける。蔵を守りながら、利用しながら、中心市街地の活性化を目指している。また、伝統的な産業である箆笥と新しい産業であるガラス細工の両輪で動いているので、この二つを融合した新商品なども開発して行きたい。

事例紹介 2 港まち函館 色彩 の変遷

柳田 良造

YANAGIDA RYOZO

JUDI北海道ブロック

函館は、幕末に横浜や神戸とともに開港場となったことで洋風文化が流入した事が、まち並みの背景となっている。公会堂が創建当時の色とともに再現された時、鮮やかな色彩がとても印象的だった事から、戦前の函館は、もっと大胆な色彩の街並みがあったのではないかと仮説を立てた。調査をしている中で、町家の窓枠に塗られたペンキがはがれたところに、古いペンキの層が厚く重なっている事を発見した。歴史的な建物を選定して、外壁をサンドペーパーでこすると昔のペンキの層が縞状に出現したので、これを「時層色環」と名づけた。

大町郵便局の場合を例にとると、外壁には13層の色が使われていた。調査当時の建物の歴史が1911年から1987年の76年であるため、塗り替えの周期は約6年であると判断できる。昔を知る局長夫人にお話を伺うと、5番目のグレー色は戦時中の迷彩色、戦後の昭和22年には黄色、昭和28年には薄い緑色であった。昭和56年からは、壁がアイボリーで窓枠が茶色というアクセントカラーを使った時期もあった。85棟の建物についてこのような調査を行って色彩変遷のチャートを作り、そのデータを地図上に落とすことによって、時代ごとの色彩の変遷を判断することができた。その分析結果から、函館のまちの色彩には大きな5つの変化の傾向が読み取れた。明治初期は白、アイボリーが中心。大正～昭和初期は色合いが濃く、種類も多い。戦時中はグレーや迷彩色が多い。戦後はパステル色が流行。最近の一部はアクセントカラーで塗り分ける傾向にある。

函館の街並みの色は時代とともに変わっているが、それは住民の暮らしの中にエピソードとして記憶されている。有名な女子校にあやかっぺピンク色を選んだり、公会堂の色にあこがれたり、個人の好みだけでなく、街の暮らしや街並み、シンボリックな建物に影響を受けて自分の家の外壁の色を塗っている。色を選ぶ基準が、汚れが

目立たない、飽きがこない、というような消極的な動機ではなく、むしろ自己主張的であり、かつ環境との関係を持った色彩が選ばれてきた、そう言う背景が読み取れる。

函館の街のペンキ塗り替えも、かつては塗装業者が自転車で回りながら持ち主と相談して下見板を塗り替えるなど、地域の伝統があった。そのような、今は途絶えたペンキ文化を継承する仕組みとして、学生を中心としたペンキボランティア隊を結成して、毎年夏休みに傷んだ建物の下見板を塗り替える活動をしている。ペンキを塗り替えるだけで建物や街が生き返る。

このようなまちづくり活動を支援していること、研究コンクールで得た賞金をもとに「まちづくり公益信託」を設立した。主な助成活動として市電クラブや夜間景観研究会がある。

函館山からの夜景は観光的に有名ですが、街並みレベルでも歴史的な建造物がライトアップされている。しかし、建物の外から光を当てているだけでは「なにか変だ」という思いがあった。本当は生活の灯りが室内から漏れている事がいい景観であって、それが地域の暮らしを伝える事になるのではないかと、言う研究をしている。

日本人の伝統的な色彩感覚には、「滲み出す色」、「移ろう色」、「重ね色目」の三つがある。「滲み出す色」は、日本の風土の特徴である、湿度が高く、輪郭がぼやけたような色合い。「移ろう色」は、虹や紅葉などのように、固定的なものではなく、はかないものであるという感覚。「重ね色目」は、いろいろな色を重ねて美しさを作るやり方であり、十二単や和服の襟などに代表される。

函館は、明治の近代化以降に発展したまちですが、今日お話しした「時層色環」や街並み色彩の変化はこれらの日本人の伝統的な色彩感覚とどこか共通するところがある。また色彩を考えていく時には、色の名前も日本語の美しい言葉で表現していく事が大事である。

東北の田舎景観を求めて

松村 みち子

MATSUMURA MICHIKO
JUDI編集担当

東北ブロックと北海道ブロックの共催による「長井フォーラム」の企画を知り、取材を兼ねて参加することにした。2日にわたるフォーラムの開始は午後1時である。せっかくの東北訪問でもあり、長井市に行く前に東北の田舎景観の現状も見ていく計画を立てた。午前9時半、東北新幹線白石蔵王駅で都市環境研究所長の土田旭さんの車に同乗させていただく。国道113号を米沢方面めざして走る。峠越えとなるこのルートは、江戸時代の参勤交代路でもあった。羽州街道の一部で「七ヶ宿(しちがしゆく)街道」とも呼ばれている。

道はいつの時代にもその時代の国土思想を反映しつつ整備され利用されてきた。古代の律令時代は中央集権国家をつくるための官道(七道駅路)を、中世には軍事的な必要性ならびに参詣のために道を整備した。そして近世には江戸、あるいは城下町を軸として計画的に道を開発、整備した。羽州街道は奥州街道桑折(こおり)宿から分岐し、出羽国を一路北上する。出羽の十三大名はこの街道を江戸への往来に利用した。伊達政宗や吉田松陰が通ったことでも知られている。七ヶ宿街道の名の由来は、山中に七つの宿場があったことによる。七つの宿場は南から、上戸沢宿、下戸沢宿、渡瀬宿、関宿、滑津(なめづ)宿、峠田宿、湯原宿であった。そのうち渡瀬宿だけは今、七ヶ宿ダムの湖底に沈んでいる。

下戸沢宿に期待して道を下りたが、集落のほとんどが瓦屋根に葺き替えていて往時の面影を偲ぶことはできなくなっていた。こうして貴重な農村景観が失われていく現実を目にするのは、悲しい。

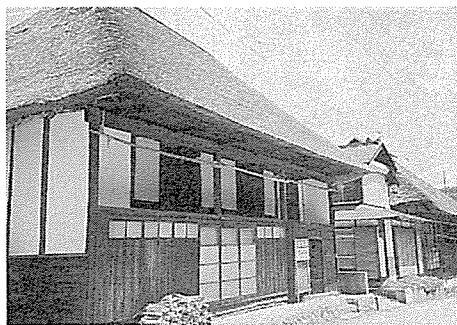


写真1 七ヶ宿街道の下戸沢宿にわずかに残されている萱葺き屋根の家

■「足るを知る」を心がける大内宿

数年前、会津西街道の大内宿を訪れたときの景観をふと思い出す。福島県下郷町にある大内宿は国の重要伝統的建造物群保存地区に指定されている。茅葺き屋根が軒を連ねる景観は圧巻ですらある。1996年から大内宿周辺部の道路に「ウォーキングトレイル事業」が実施され、木の橋や案内板の設置、既存建造物の修景などが行われた。しかしながら、せっかく江戸時代の景観をつくり出しても道路がアスファルトのままでは風情がない、という声が出て、住民たちはなんと既設のアスファルトを撤去し、土の道を復元した。この経緯を知りたいと大内宿を訪問したのであった。

土の道は「江戸時代へ翔(かけ)る道」と称され、アダプトロードになっている。土の感触が心地よい。もっとも現代では車は必需品でもあり、車の通れる生活道路は家の裏側にちゃんと確保されていた。

大内宿の住民は国の重要伝統的建造物群保存地区の選定を受けることについて、長い歳月をかけて話し合った。手間のかかる茅葺き屋根を保存していくには、茅葺き職人の後継者も育成していかなければならない。それに気づいた吉村徳男さんのよ

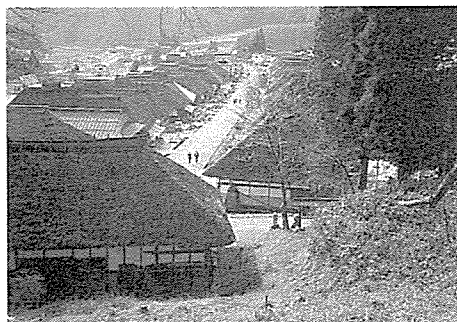


写真2 大内宿（福島県下郷町）



写真3 茅葺き屋根が軒を連ねている大内宿

うに、役場を辞め、手打ちそば職人をしながら茅葺き職人をめざす人も現われた。いま、1年に数軒ずつのペースでトタン屋根が茅葺きに葺き替えられている。観光客も飛躍的に増えた。しかし一番印象に残ったのは、人情味あふれる観光地であり続けるためには「足るを知ることが最大の術」と語ってくれた地元の人のことばであった。

■滑津宿に残る「安藤家」

さて、七ヶ宿街道を長井市に向かって走っていくと、手打ち蕎麦屋らしい店の看板が見えた。車を停めて「奥州山中七ヶ宿街道滑津宿吉野屋」と書かれた木製の道標をしげしげと眺めると、横に「江戸へ八十三里三十三丁 伊達郡桑折宿へ六里三十二丁」と記されている。店の向い側の道沿いには滑津宿の本陣を務めた安藤家住宅がある。山中七ヶ宿街道の中で260年の歳月を経て残る唯一の建造物という。街道に面して平入り、寄棟、萱葺きの宿泊専用の一棟があり、この奥にこれと直角に萱葺きの住居が接続しているらしいが、現在は安藤家の居宅であることと、建物保護のため門内に入ることはできない。



写真4 滑津宿の安藤家（宮城県七ヶ宿町）



写真5 やませ蔵（山形県長井市）

■やませ蔵に着いて（初日）

目的地である「やませ蔵」には、ちょうど午後1時頃着いた。ここが「長井フォーラム」初日の主会場である。

やませ蔵は、江戸時代から続いていた紬問屋「山清（やませい）」の屋敷にあった五つの蔵を、長井の大切な資源として長く活用することを目的として、建築家の二宮氏が中心となって修復したものである。1991年7月に美術館として開館し、市民に開放されている。明治時代に建てられた蔵では、代々の当主が集めた美術コレクションや、紬関係の資料が展示され、蔵の空間を利用して季節ごとに様々なイベントが行われている。

プログラムによると、本日は「ステップ1 長井の色に染まる日」となっている。初めて訪れた人たち（JUDIメンバー）が、長井のまちについてその生い立ちを学び、長井の色に染まる一日ということである。地域の人たちは長井の歴史的、文化的風土の良さをアピールする。その後、まち歩きの中から資源を抽出し、地域の色を考える、というスケジュールだ。

東北芸術工科大・日原もとこ教授の講演、長井のまち講座（住民による地域アピール）、まち歩き（フィールドワーク）、まちの色の整理と盛りだくさんである。

長井のまち講座では、建築家・二宮正一さんが「長井の生い立ち」と題して、地理的風土、歴史的風土、地域文化の紹介をした。長井市教育委員会の村上和雄さんによる「黒獅子と長井紬に見る粋な職人氣質」では、名前の通り顔が真っ黒で毛がもじゃもじゃで、かつ鼻毛が長いという特徴を持つ長井の黒獅子の説明が興味深かった。またレ

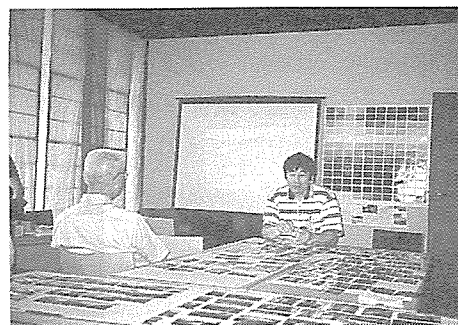


写真6 JUDIメンバーによる事例発表

レインボープラン推進協議会会長の横山太吉さんは「長井の風土が作り出した循環の技～レインボープラン～」の紹介をされた。

日が暮れるまでたっぷりと話し合い、その後タスパークホテルに移動して、夜10時過ぎまで食事をしながら交流を深めた。

■長井のまちを染める日(2日目)

フォーラム2日目は、「ステップ2 長井のまちを染める日」である。主会場は午前中が「やませ蔵」で、午後が「獅子宿」である。来訪者による提言や事例紹介を参考として、長井の風土色(資源)をまちづくりに活かす方法論を展開するわけだが、主役はあくまでも地域に生きる住民である。JUDIメンバーはサポーター役に回る。

感性マーケティング研究所の佐藤邦夫所長の講演のあと、東北および北海道における風土色を活用したまちづくりについてJUDIメンバーが発表した。演題は東北ブロックの及川純一さんが「江刺市の蔵を活かしたまちづくり」、北海道ブロックの柳田良造さんが「港町の近代化・町並み色彩の変遷」であった。

チャーターバスで移動した「獅子宿」は燗(いぶし)亭という手打ち蕎麦屋であった。広い座敷を持つこの店は100年以上前の茅葺き民家を修復したものだという。建物の右手に黒獅子が置かれている。ここのオーナーは獅子彫り職人もしており、建物の二階で獅子舞関連の資料なども展示している。

おいしい蕎麦をいただいたあとは、車座談議。これまでの成果に基づき、参加者たちで地域の風土色をまちづくりに活かすための方法論を探った。

2日間、本当に密度の濃いフォーラムであった。



写真7 獅子宿の外観

長井フォーラム参加者:敬称略

■外部講師

日原 もとこ:東北芸術工科大学

生産デザイン学科教授

佐藤 邦夫 :感性マーケティング研究所
所長

■JUDI会員

山崎 正弘 : (株)ハウ計画設計

柳田 良造 : プラハアソシエイツ(株)

酒本 宏 : (株)グランドデザイン

辻井 順 : (有)ホルス計画室

土田 旭 : (株)都市環境研究所

川井 由寛 : SLAスタジオオランド
ジャパン(株)

杉山 朗子 : (株)日本カラーデザイン
研究所

松村 みち子: タウンクリエイター

斉藤 浩治 : パシフィックコンサル
タンツ(株)

山崎 洋二 : (株)都市創造研究所

及川 純一 : (有)環境造形研究所

■長井市(まち講座講師)

二宮 正一 : 建築家

村上 和雄 : 長井市教育委員会
文化生涯学習課

横山 太吉 : レインボープラン
推進協議会会長

■長井市

佐藤 義夫 : 長井市収入役

松木 幸嗣 : 長井市企画調整課

中井 俊彦 : 長井市商工会議所

遠藤 健司 : 長井市商工観光課

中村 睦 : ”

田中 恵梨子: ”

竹田 義一郎: やませ蔵館長

竹田 靖子 : ” 副館長

木村 廣 : ” 事務長

■スタッフ

佐藤 治 : パシフィックコンサル
タンツ(株)

金子 幸司 : ”

千葉 清護 : ”

星山 宣之 : ”

藤原 麻樹子: ”

(合計 30名)

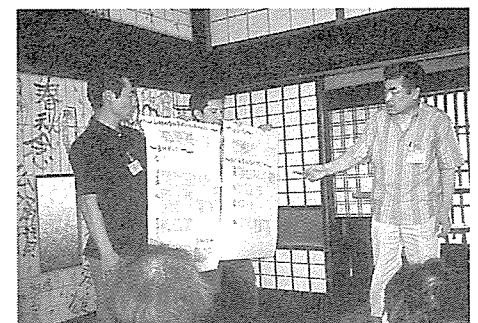


写真8 獅子宿での車座談議のとりまとめ

人首村

及川 純一

OIKAWA JUNICHI

環境造景研究所

岩手県江刺市米里は、かつて人首村と呼ばれた。名称が代わった今でも町並は人首町、町の横を流れる川は人首川と呼ばれ人首の名が残っている。

人首村と聞いて横溝正史の世界を想像した人もおられると思う。名付けの理由におどろおどろしい過去を期待されても困るが、人の首と大いに関係するのは事実である。

その昔桓武天皇は、蝦夷の国であるこの地域(奥六郡)を制圧しようとした。坂上田村麻呂が征夷大將軍としてやって来たとき、抵抗したのが蝦夷の族長「悪路王」(大岳丸)であった。悪路王は勇敢に戦い朝廷軍に多大な損害を与えた。しかし、延暦20年(801)に平泉の達谷の巖谷で捉えられ、処刑された。その子人首丸はこの地(人首村)に逃れ大森山に隠れた。やがて朝廷軍の知るところとなり、激しく抵抗したが大同2年(807)に捉えられ斬首された。御年15歳。美少年であったという。

田村麻呂は大森山に小さな神社を造ってその霊を祀った。口伝では切られた首が空を飛び、山の下を流れる川に落ちて水を真っ赤に染めたという。それ以来この地は人首村、その川は人首川と呼ばれるようになった。今から1200年程前の話である。ただし人首と書いて「ひとかべ」と読む。

私はこの地に親戚がいて、小学校の殆どの夏休み、冬休みをこの地で過ごしていた。起伏に富み奥深い北上山地のはずれ、山ひだに抱かれるように集落が存在する。集落は百年以上も前に造られた屋根の大きい直家で構成され、典型的な山村景観を見せていた。今でもそれは変わらないが、こども心にも美しいと感じていた。

また、水も豊富で沢が多く、それが集まって少し大きな沢となり、さらに大きな川にそそいでいく。それがなんとなく不思議だった。もちろん川の恵みは多く、山間にはイワナやヤマメ、ウグイ、オイカワ、カジカなどがうようよいいた。私は親戚の子に箱めがねとヤスで魚の採り方を教わった。

この地は私の原風景を育んでくれた所なのである。

一方で非常に不思議な文化を持つ地でもある。山村でありながら都会の匂いがするのである。言葉ではとても説明できないが、これが私を引きつけるもう一つの魅力に

なっている。

人首の町は東北新幹線水沢江刺駅から約20km北東に位置する。周囲を山に囲まれた小さな町である。宿場町としてのかつての賑わいはなく、寂しさを誘う。しかし、町を歩くと木造ではあるが大正から昭和初期に建てられた洋風の建物が残っていたり、逆に城塞の下に当時の家老の家が残っていて、往時を忍ばせてくれる。

人首の町を過ぎて県道を東に向かうと山塊にぶつかる。道はそこを蛇行しながら上っていく。トンネルを三つくぐると峠に出る。そこが宮沢賢治ゆかりの種山高原である。高原の端に大森山が見える。

宮沢賢治は大正6年(1917)8月に、江刺郡役所の要請で江刺を訪れ地質調査を行っている。そのときの感想を「五輪峠」や「人首町」という作品に残している。昭和37年には種山高原に賢治の文学碑が建立されているが、草野心平や串田孫一がここを訪れ詩や文章に感動を残している。また、柳田民俗学成立に大きな貢献をした佐々木喜善も遠野からこの地に入り、人首町の感想を作品に残している。多くの文学者もその不思議な魅力を感じたようだ。余談だが、この地は詩人佐伯郁郎の生誕地でもある。

人首の持つ不思議な魅力の形成には、その歴史が大きく影響しているのだろう。この地は、慶長11年(1606)には伊達藩の領地となり南部藩との藩境として重要な位置にあった。そのため伊達一門である沼辺氏が専封され警護にあたった。また、この地は内陸と沿岸を結ぶ交通の要所であり、宿場町として栄えた。宝暦13年(1763)の風土記によれば人首村の人口は2,738人と記されている。当時から江刺郡の中心地は片岡村(今の岩谷堂)で、やはり伊達一門の岩城氏が城塞を築き町を形成していた。その片岡村の人口が2,761人であることを見れば、一山村である人首村の繁栄ぶりが知れる。

この地は地質学的にも面白い所である。金、銅などを産出する鉱山がかつてはあった。特に金山は多く、大野、小屋沢、古歌葉(こがよう)の金山は平泉の藤原時代に発見採掘されたもので近世まで産出していた。特に古歌葉金山は藤原泰衡の時代に奉行所が置かれるほどだったという。古歌葉金山は古歌葉集落の入り口近くにありそれを

知らせる標柱が立っている。古歌葉集落は種山高原の直ぐ下であり、今は盆地の底に約10数戸がひっそりと軒を並べているだけである。

当時の鉾山は公政不入の地とされ、一種の治外法権地域であった。そのため多くの切支丹が流れ込み鉾山で働いていた。伊達政宗は当初切支丹を容認していたし、その家来である後藤寿庵は水沢で布教活動を行った。そのため水沢、前沢など岩手県南は切支丹が多かった。その後禁止令が出ると、切支丹は隠れ場所として鉾山を選んだ。また、宣教師たちも鉾山を巡って布教活動を行ったようである。

明治になると禁止令が撤廃されたが、この地にはロシア正教とカトリックの教会がそれぞれ建設されることになる。小さな町の中にキリスト系教会が二つあったのである。宣教師は盛岡、水沢、岩谷堂を経てこの地に入り、ここを宿所として遠野や沿岸地方へと布教をした。

ロシア正教は明治12年からこの地で布教が行われ、23年に教会堂が建設された。

当時の信者は300名を越えたという。その後教会堂は二度も火事に遭い、現在は残っていない。明治40年のロシア革命以後急速に衰えて、信者も大正末には120余となり、現在は14名である。

カトリックは明治17年に教会を建てている。38年頃アンジェラスの鐘(フランス製)を設置した。以後第二次大戦後の一時期まで毎日、この鐘の音が山間に響き渡っていたことになる。

この地は蝦夷の文化を下地にしながら、平泉文化、宿場町に泊まる人々、鉾山で働く人々、キリスト教信者など多くの人々と彼らの持つ文化を受け入れてきたのだろう。山村なのに都会の文化がするような不思議な感覚は、このような歴史によって生まれ、育まれてきたものではないかと想像する。

現在もこの地は、都会からの移住者を多く受け入れている。一つの集落の半分近くが移住者というところもある。今度はこの人たちによってまた新しい人首文化が生まれてくるのかもしれない。

たどり着くためのデザイン

中村 豊四郎

NAKAMURA TOYOSHIRO
アール・イー・アイ

最近担当したリゾート施設のサイン計画で開業直後に手直しが生じた。

メインのレストランはロビー階に出入口を設け、内部の階段を降りる客に視界の変化を楽しませる様にデザインされている。客席の階にも出入口があり、こちらはアクセシブルルートと、混雑時のバイパスとしての想定だ。共用エレベータからはどちらの階の入口も選べるが、ロビー階を主入口とすることで施設全体の誘導計画をおこなった。

さて開業して運営現場から、客席階の入口を主にするようサインを改めたいとの要求が出た。予想以上に車いす使用者が多かったことや、初期の混乱で客席階の出入口を一般解放したため、リピート客がそのフラットルートの利用を望んだ結果だ。他の要因もあり、バリアフリーだけを論じる事は公平ではないが、“あそび”を売るリゾート施設が、客席へたどり着くためのデザインがなされたアプローチを放棄することには、割り切れないものを感じる。

リゾートと違って、交通施設では上下移動のルートの案内は結構難題である。交通バリアフリー法施行以来、既存駅にも苦心してエレベータが設置されたが、殆どの場合、主動線から外れた場所に配置せざるを得ない。そのためそこに誘導するサインにこれまた苦心している。階段とエスカレータとエレベータが同時に見えれば自分の好むルートを選ぶ事が出来る。だがこのような駅はわが国にはまだ少ない。

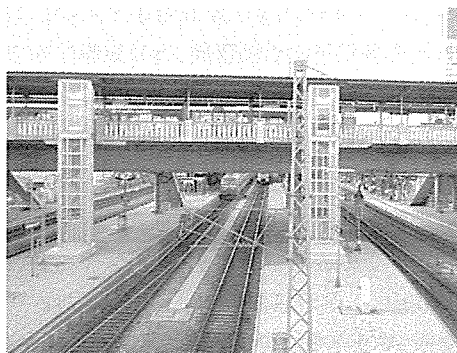


写真1 フライブルグ中央駅
列車ホームの跨線橋がトラムの停留所で、階段、エスカレータ、エレベータの位置が一目瞭然

ドイツ南部の都市フライブルグはエコロジーに取り組む例として名高いが、この中央駅は明瞭な構造である。

国鉄(DB)の列車ホームの跨線橋がトラ

ムの停留所である。双方は階段、エスカレータ、エレベータで結ばれており、跨線橋には自転車預かり所やカーシェアリングのオフィスの出入口がある。一方、列車ホームには地下道もありこちらは駐車場や駅広の対岸に続いている。トラム停留所を列車ホームの上空に持って来たのは素晴らしいプランだ。移動手段は一目瞭然である。



写真2 西湖畔の線状ブロック
道路のカーブに沿ったきれいな曲線で敷かれた誘導用ブロック

では見えなければどうするか。

中国杭州に現代的な感覚で作られた商業エリア西湖天地、これにつづく歩道には道路のカーブに沿ったきれいな曲線で本石の誘導用ブロックが敷かれていた。

点状ブロックに比べて、線状ブロックを敷設する国は少ない。誘導用ブロックは舗装材としての形状素材、敷設配置のルール、それに視覚障害者の歩行経験から成り立つシステムである。私の知人で全盲の彼は「僕は路面電車ではない。なぜレールの上のみ歩かなければならないのか」とよく言う。無論彼のような意見の人ばかりではないが、誘導用ブロックが通過するための装置であることには違いない。湖畔の公園を楽しむための仕掛けは、様々なテクスチャーやパターンでデザインされた舗装だ。これらは視覚だけでなく感触の変化が水辺へと誘う。

話を初めのリゾート施設に戻そう。現場との妥協点として、「階段を通った方が客席へのアプローチが愉しいですよ。でも段差の無いアプローチを望む方はこちらからどうぞ」という仕分けをサインで解決せよ、という事になった。これも難題だ。

■選挙管理委員会 役員選挙

都市環境デザイン会議会員各位

都市環境デザイン会議
選挙管理委員会
委員長 伊藤 洋

告示日 2004年2月18日

■都市環境デザイン会議代表幹事ならびに 監査役の選挙について

この度、役員の任期満了に伴い、代表幹事、監査役を選挙により選任することになり、役員選挙規定第12条により、選挙管理委員会を設け、選挙を行うこととなりました。規定第7条2項に基づき下記のとおり選挙の告示を致します。

以下の点についてご留意の上、多数の立候補を期待致します。

記

1. 今回選出される人数は以下のとおりである。

代表幹事 …… 10名

監査役 …… 2名

2. 役員は、あらかじめ会員の選挙によって選出された候補者が、7月（予定）の総会において承認されることにより選任される。
3. 選挙権と被選挙権
第6条 選挙権を有する会員は、選挙告示の日から一ヶ月前（2004年1月18日）までに会員として資格を有したものである。
2 被選挙権を有する会員は、選挙告示の日から一ヶ月前（2004年1月18日）までに会員として資格を有したものである。
4. 役員の任期は2年とする。
5. 候補者の形式について
代表幹事、監査役の選挙には2通りの形式がある。
（1）自立による立候補
（2）選挙権を有する正会員2名の推薦を受けた推薦候補者
6. 推薦人は候補者を代表幹事においては2名、監査役については1名まで推薦できる。
7. 候補者の届出は次の様式に従った届出書を用いて行う（大きさはB5）。用紙は事務局においてあります。
 1. 推薦候補の届出には、候補者本人の自署、捺印が必要になるので注意のこと。

9. 届出は、都市環境デザイン会議選挙管理委員会（〒113-0033 東京都文京区本郷2-35-10 本郷瀬川ビル TEL 03-3812-6664 FAX 03-3812-6828）宛とし、提出期限は2004年3月3日（水）午後6時とする。

10. 投票は、役員選出規定第7条に規定されているとおり、別途送付される投票用紙によって、無記名、通信制で行うものとする。なお、投票期間は投票用紙送付（3月25日頃）から4月7日（水）（当日消印有効）までの予定である。

■都市環境デザイン会議2004年度役員選挙 スケジュール（予定）

2月18日（水） 選挙告示
3月 3日（水） 立候補届出締切（午後6時）
3月25日（水）頃 投票用紙送付
4月 7日（水） 投票締切（当日消印有効）
7月頃 第14回通常総会で承認

事務局より

1. 新会員の紹介

2003年9月1日～10月31日の入会者は下記の通りです。(入会順、敬称略)

10月31日現在の会員数は、479名です。

正会員氏名	勤務先(ブロック)
石嶺 一	(株)沖縄計画機構(沖縄)
田中 稔	松下電工(株)(関西)
呂 斌	北京大学城市環境学系(海外)
漆 平	広州大学建築都市計画学院(海外)

2. 退会者(2003年9～10月)

奥山健二、近藤周司、鈴木崇英、須谷修治、松宮喜代勝、山本忠夫、脇坂和彦(敬称略)

西沢健氏が逝去されました。慎んでご冥福をお祈りいたします。

3. 住所変更等(敬称略)

氏名	変更内容(新)
尾辻 信宣	Glocal Vision 〒856-0825 長崎県大村市西三城町 6-16-101 Tel.&Fax. 0957-54-3509
横山 葵	(有)エイライン 〒540-0028 大阪市中央区常盤町2- 1-15 大松ビル Tel. 06-6910-8855 Fax. 6910-8858

編集後記

第13期は、12期の共通テーマであった「人と場の活性化」を引き継ぐ形で、各地で進められている地道な活動を取り上げていきます。紙面づくりに当たってはブロック会員の主体的な参加を前提に担当委員が対象都市に出向き、ブロック会員との交流を図りながら進めることになりました。実は本号で取り上げた「長井フォーラム」は12期中の活動として実施されたものです。公

募制プロジェクトという新しい企画でもあり、JUDIにも結果報告を載せてほしいとの要望もあり、編集し紹介しました。本号に掲載した「長井フォーラム」の写真は編集担当が撮影したものを使用しています。

なお、第12期公募制プロジェクトの製本された正式の『報告書』は事務局に保存されています。

広報・出版委員会

澤木 俊岡	石崎 均
土田 旭	伊藤 光造
近田 玲子	加茂みどり
菅 孝能	河本 一行
中嶋 猛夫	森川 稔
櫻井 淳	横山あおい
松村みち子	吉田 慎悟
白濱 力	作山 康